

クラウド型システム『Wun-jin』で 手入力による時間と手間を削減 属人依存を排除し、安定した運用を実現



導入の狙い

- ・目的別に細分化されたシステムの統合
- ・属人化からの脱却
- ・手入力による手間やミスの削減

導入システム

- ・クラウド型生産販売管理システム『生産革新 Wun-jin SMILE V Air』

導入効果

- ・業務の標準化、共有化による安定した運用を実現
- ・システムの一元化管理による、正確・迅速な処理を可能に



クラウド型生産販売管理システム『生産革新 Wun-jin SMILE V Air』を導入して業務を集約、安定した運用を実現

株式会社伊達電器製作所は、半導体の製造工程で欠かせない電力制御装置を製造する企業だ。かつて利用していたAccessを用いた基幹システムは、目的別に細分化されていることに加え、属人化していることが問題となっていた。そこで、OSKの生産販売管理システム『生産革新 Wun-jin SMILE V Air』を新たに導入し、データの一元管理と業務の標準化を実現。手入力にかかる時間や手間を大幅に削減し、正確な帳票出力を可能として、業務の生産性を大きく向上している。

USER PROFILE

株式会社伊達電器製作所

【業種】電気機械器具製造業

【事業内容】半導体製造装置の組立・検査

【従業員数】66名（派遣社員含む、2025年7月現在）



2025年7月取材

半導体製造に必須の装置を手作業を中心に生産する

株式会社伊達電器製作所（以下、伊達電器製作所）は、1951年に東京都府中市で鉄道車両モーターの部品を組み立てる個人企業として創業。以来、電力会社向けの配電盤や制御盤をはじめ、信号機や屋外大型時計など、さまざまな製造業務を担いながら技術力に磨きをかけてきた。

現在は、半導体の製造工程で使用する熱処理成膜装置用の電力制御装置の生産に特化したビジネスへとシフトしている。熱処理成膜装置の仕様に合わせて、発注元とともに電力制御装置の受託設計を行う。ワイヤーハーネスなど協力会社に発注して製作されたものの組み立てや配線を、自社工場の手作業で行い、電気試験や機能検査を実施する。完成した製品は、提携している運送会社のトラック便で、主要取引先である東京エレクトロンテクノロジーソリューションズ株式会社のエンドユーザーへと納品される。

近年の半導体の需要増に伴い、秋田県内の三つの工場（大曲、太田、協和）ではそれぞれ役割分担して増産体制を整え、業績を着実に伸ばしている。

協和工場 主任の田口 宏和氏は、「弊社の製品は構造が非常に入り組んでいるため、機械やロボットによる組み立てが困難なので、ほぼ手作業です。海外への出荷も多く、相手先に合わせた詳細な仕様の調整が必要な細かい作業が多いのですが、女性従業員も多数活躍しています。これまでに培ってきた技術を礎に、高品質な“ものづくり”を追求しています」と語る。

高いスキルを持つ従業員の存在が欠かせない同社は、働きやすい職場づくりのために、さまざまな試みを行っ



構造が複雑な電力制御装置の組み立ては、手作業で詳細な仕様の調整を行う

ている。「置き型社食サービス」の導入や、休憩時間のコミュニケーション促進やリフレッシュを目的とした卓球台の設置、さらにヨガ講師を招いての「オフィスヨガ」レッスンの開催などはそれらの一環だ。

業務面においても、従業員の負荷軽減を目指している。2018年のスマートフォンを利用した作業実績工数集計システム導入を皮切りに、全従業員へのタブレット端末の貸与、在庫管理システムの導入による在庫管理や棚卸しの負担軽減、顔認証による勤怠管理システムの導入など、DX化を強力に推し進めている。

個別管理から統合管理へ クラウドによるデータの一元化

以前は、受注用や発注用などに細分

化されたAccessで作成したシステムを用いて、各担当者が個別に作業を行っていた同社。サーバーは工場ごとに設置され、それぞれフォーマットが異なるなど、各システムの連携が難しい仕様であった。そのため、徐々に効率の悪さが目に付くようになったという。協和工場 主任の千葉 奈緒希氏は、当時の課題を次のように振り返る。

「以前利用していたAccessのシステムでは、全社データの集計ができませんでした。手作業で転記作業をするので、ミスが発生することもあり、効率低下の大きな要因となっていました」

そこで、社内のDX化の一環として、全拠点の業務を統合管理できるパッケージソフトの検討を開始した。導入にあたって重

協和工場 主任
田口 宏和氏

「『Wun-jin』の導入により、手入力による手間やミスが大幅に削減されました。日々の業務が円滑になり、かつ協力会社さんの業務負担も軽減できたことは喜ばしいです」



協和工場 主任
千葉 奈緒希氏

「従来の属人化した作業を、標準化へと転換することが大きな課題となっていました。今回、その試みが大きく前進して満足しています」



視したのは、クラウド上でデータを共有し、一元管理ができることであった。これらは、サーバー運用管理の手間の軽減を考慮したものだ。

候補として挙がった6製品の中から最終的に選んだのは、リコージャパン株式会社から提案されたOSKの生産販売管理システム『生産革新 Wun-jin SMILE V Air (以下、Wun-jin)』であった。他社の製品が大規模な製造業向けで、費用も高いことに対し、予算内で最大のパフォーマンスをもたらしてくれる、と評価したのだ。クラウド型であることに加え、販売管理と個別受注生産が中心の生産管理、双方の機能を持つことが同社の実務に適合し、2024年11月に導入をしている。

「『Wun-jin』は、弊社の業務内容や規模に最適なソフトと判断しました。決め手となった一つが、自由帳票設計業務オプションです。拠点ごとに異なっていた帳票の刷新、統一ができること、さらに自分たちで帳票を効率的に作成できることも期待しました」(千葉氏)

『Wun-jin』と『Access』 2本立てのシステムで運用

2025年4月から本稼働した『Wun-jin』は、販売管理と生産管理の両方の機能を兼ね備えているが、現時点では販売管理機能のみを活用する。生産管理については従来どおりAccessで作成したシステム



創立70周年を期に、東北三大祭りの一つ「秋田竿燈まつり」に参加した。当日は、この提灯を46個つるした竹竿を、「差し手」が手の平や額に載せる妙技を行う

を利用して、受注～出荷、発注処理を行い、その検収・発注データを『Wun-jin』に取り込むという、作業の切り分けをしているのだ。

今回のシステム刷新を機に、マスターの見直しも行っている。Accessでは複数のシステムが存在したため、それぞれのデータを精査してマスターを作成する作業には少なからず苦労したという。

たとえば、部品コードにはひらがなや漢字が交じっていて統一性がなかった。それは各拠点の業務担当者が個別に作成していたことが原因なので、社内で話し合いながら部品コードを英数字で管理する統一ルールを定めた。このようにして整備されたマスターは、『Wun-jin』、Accessの生産管理システム、の双方で利用されている。

同様に帳票類の見直しも行い、既存帳票の整理や、システムから出力すべき帳票の検討を行った。標準機能ではカバーが難しかった注文書や現品票、発注残一覧表など6種類の帳票については、自由帳票設計業務オプションを活用して作成している。

なかでも効果が大きかったのが、協力会社への発注の際に使用する、注文書と現品票だ。平均して月

に1,500件ほどある注文に対して、以前は注文書の作成、チェック作業に割く時間が少なくなかったという。一方、手入力で納品書を作成していた協力会社も、計算ミスや転記ミスがしばしば発生していた。しかし、発注時にこの2票のデータを提供することで、これらの問題は解消された。協力会社が完成した製品の納品書として現品票を添付して納品することで製品と伝票の不一致や伝票の作成ミスはなくなり、製造現場ではどの製品に使用する部品なのかが一目でわかるため使用を間違うこともない。

協和工場 主任の武藤 嘉晴氏は、「これまで、手入力して注文書を作成していました。事業拡大に比例して注文書の数も増します。注文が遅れると工程に支障が出るため、常に時間に追われているような状態でした。今は、発注データから注文書が作成できるので、格段に効率化されました。ありがたいです」とそのメリットを語った。

「協力会社さんへ『今後は納品書を作成していただかなくても大丈夫です』とご案内したところ、大変喜んでいただけました。社内のみならず、協力会社さんの業務効率化にも寄与できたことをうれしく思っています」(田口氏)

協和工場 主任
武藤 嘉晴氏



「以前は、協力会社さんへの依頼や発注業務に追われている状態でしたが、『Wun-jin』の導入によって手作業の手間が減り、時間的に余裕を持って対応できるようになりました」

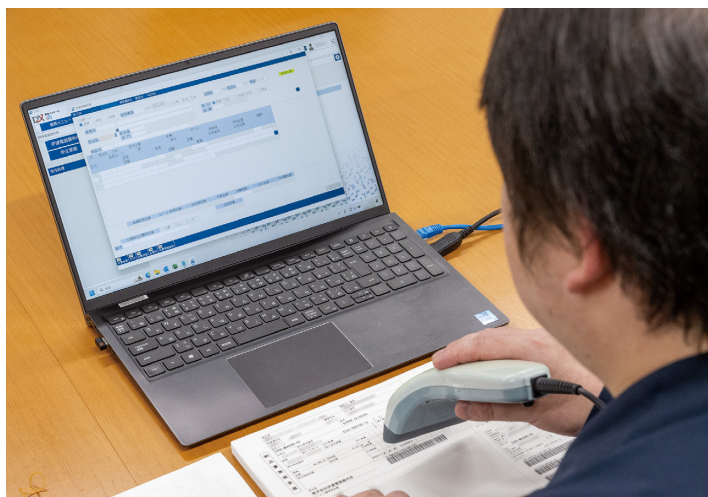
事務作業のスピードアップに 貢献する『Wun-jin』

新システムが本稼働してからはまだ短いですが、すでに導入効果が表れている。

特に、支払業務の効率化を実感しているという。かつては、請求書と社内台帳の数値に一部差異が生じることもあった。現在は、支払明細書を出力して、協力会社に確認してもらう運用となったことで入力ミスによる金額間違いがなくなり、会計処理を行うメンバーのチェック作業負荷も軽減されている。まさに三方良しの状況だ。

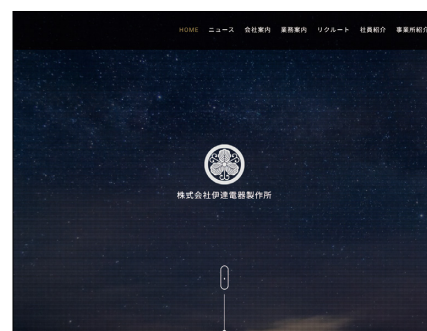
「以前は、週に一度、協力会社さんからの納品書と弊社の伝票の照らし合わせの作業を行っていました。その作業が不要となり、事務作業がたいへんスピーディーになっています」(田口氏)

Accessの販売管理では、それぞれの業務が担当者に強く依存していたため、担当者の不在は業務に大きな支障を来す恐れがあった。しかし、『Wun-jin』で業務の標準化と情報共有の仕組みを整えて、手作業を極力減らしたことによって、他のメンバーでも対応可能な体制へと改善した。業務を共有化することで、属人化を脱却できた効果は大きい。まだ、Accessで処理を行っている作業はいくつかあるため、随時それらの見直しをしていきたいと考えている。



現品票のバーコードを読み取ることで、受入(仕入)処理が実施される。手入力は不要だ

『Wun-jin』導入によって業務の効率化をスピードアップした伊達電器製作所。今後も新システムを活用して、期末の棚卸しや帳票作成に着手し、工数削減を進める方針だ。



株式会社伊達電器製作所のホームページ

<https://www.date.co.jp/>

お問い合わせ